1月の学習会の案内

平成２７年１月１３日

新年あけましておめでとうございます。本年もみなさま方のご協力のもと、会をさらに盛り上げていければと考えています。引き続きよろしくお願いいたします。

平成２７年最初の会は、昨年からの引き続きで附属小学校の研究発表会の内容について改めてご報告し検討していただく会となります。附属小学校の幼小中一貫教育研究の幼小の部分については、１２月に小野が報告いたしました。今回は、小中の接続を意識して行った５年生の実践を難波から報告いたします。小中一貫ということについては、岡山県内でもいろいろと取り組みが行われています。そうした各地域の実情等も踏まえた上で色々なご示唆がいただけると幸いです。多くの先生方のご参加をお待ちしています。よろしくお願いします。

また、合わせまして２月１４日（土）に行う実践発表会についても下記にてご案内しています。今回の公開授業は、１年生（小野）が「読むこと」（説明文）、４年生（小出）が「書くこと」、５年生（難波）が「読むこと」で行う予定です。お忙しい折とは存じますが、こちらにつきましてもぜひ大勢の先生方にご参会いただけるとうれしく思います。

日　時　　平成２７年１月２４日（土）９：３０～１２：００
場　所　　岡山大学教師教育開発センター　東山ブランチ２F 授業研究室
　　TEL(086)272－0511　　FAX(086)271-3455
連絡先　　小出　真規（こいで　まさき）TEL　090-5704-7339
　　m-koide@okayama-u.ac.jp（学校パソコン）
　　m-koi.freewill.ns.io@docomo.ne.jp（携帯メール）
内　容　　難波香織先生（附属小学校）の実践発表（天気を予想する　光村図書５年）

＜お知らせ＞
※　駐車場について
　東山ブランチの駐車場をお使いください。

教育実践発表会（第２回）のご案内

岡山大学教育学部附属小学校

日　　時　　平成２７年２月１４日（土）８：３０（受付開始）～１２：３０
公開授業　　１限（９：００～）　難波香織　５年は組　「読書会をひらこう」
　　２限（１０：００～）　小野桂　　１年い組　「順序に気をつけて読もう」
　　同　　小出真規　４年い組　「こんな５年生になりたいな，
　　あんな５年生になりたいな」

協議会（１１：００～１２：３０）今回は２会場に分かれて行います。
　協議会１　「１年生の授業について」　　助言　**宮本浩治　先生**（岡山大学）
　協議会２　「４，５年の授業について」　助言　**赤木雅宣　先生**（ノートルダム清心女子大学）

お申し込みは、各学校へお送りしている案内記載の申し込み票をお送りいただくか、附小メンバーへメールでして頂いても構いません。多くの先生方がお越しくだされば うれしく思います。よろしくお願いします。

12月の学習会の報告

１２月の語る会は,「どうぶつの赤ちゃん」（光村図書１年）の実践について小野桂先生（附属小学校）より報告をしていただきました。

文責　小出

田中先生より

大学の授業で教育技術総合演習というものがあって、尾島先生、前田先生、田中が担当している。その中の前田先生の話の紹介

手書きの文字を書いている過程を見る機会が子どもたちから奪われている。板書はかろうじて先生が書いて、一画が観察できる貴重な場面。だから板書を大事にしないといけない。そうじゃない場面では、家族の手書きで書く場面さえ見る機会がなくなってきている。スマホなどが普及してきている現状。子どももしばらくは手書きノートが優勢だが、アメリカなどを考えると、iPad 等の電子媒体が、これから上陸してくると、いよいよ文字が出来上がってくる過程が見えなくなってくる。書き順など無意味になってくる。

大学の学生の習字塾の経験、10 年前からいうと 3 分の 1。教育学部は比較的多い。5 割近くはいる。小学校で調査したら、3 割もいかないかも。習字に通うと、どういう文字がきれいなのか認識できるチャンスがあるが、そうでなければ、印刷された文字にしかふれられないようになっていく。時代の流れで仕方のないことかもしれない。手書きの文字は細かい手の動きを必要とする。

人間が人間として細かいことを認識できるようになったのは、二足歩行で手がフリーになってきていろいろできるようになってきたからだという話がある。そう考えるとこれからは、細かい作業の質がさがっていくかもしれない。一般の人の脳が退化していく。１００年では変わらないかもしれないが、１０００年という単位でみれば、確実にそういえるのではないか。抵抗する術はありうる。学習の中に手で書く、細かい作業をするということを入れていくことで、少しでも遅らせることができるのではないかと考える。

小川先生より

プロジェクタとコンピュータを使って講演で話をしようと思ったことがあるが、それは「小川先生らしくない」といわれてあきらめたことがある。私は、めあてを書くときは、子どもの姿勢が整うのを待つ。1 年から 6 年まで必ず待つ。文節ごとで目線をあわす。学級の一番遅い子に目線をあわす。「先生と同じスピードで書けたらすごいです。早くても、遅くてもだめです。」それには、字をくずさずにていねいに書く訓練をする意図がある。だが、現場では定着しない。それが定着してくれば、とんでもない字はなくなっていく。大元小学校では、定着していくに伴い書く内容の質も上がってきた。流行の先端とは逆行しているが、大切にしていきたい。

単元を貫く言語活動については、言語活動に目を向けてことばの力をつけるという説明になっているといい。操作的な言語活動を通して、言葉の力をつける。国語の力をつける上では、大切。国語の授業は発問ですよという人がいるが、言語活動を位置づけていくことが必要。

活用型（３次）の言語活動というのが単元をつらぬく言語活動。２次の言語活動はどうするのか。そこが理論のあとの実践には書かれないといけない。自分たちは実践の立場で、大学とはちがって、どういう姿が提案できるのかということをきちんともっておかなければならない。単元を貫く言語活動というと、その単元を通してどんなことばの力をつけるのか。1 時間ごとの授業でどんなことばの力をつけるのか、そのうえで、単元を通しての活動がこうですよといえないといけない。

〇田中先生

小川先生の話の中に、活用型の言語活動という言葉があったが、研究会では、３次を公開して、２次がどうつながってくるのかということを見せていく必要が出てきている。また、国語で身に付けた書く力を社会や理科のレポートにつながっていくような提案を見せていくのもありではないか。

＜小野先生からの実践発表＞
附属幼稚園と附属小学校のつながりについて発表。
考える力を育てることばの教育ということで一貫している。
入門期における授業改善。プレゼン資料で説明。
本時だけでなく、単元全体の説明を行う。
論理関係、読みの手がかりをどのように押さえていくかを大切にしている。
（くわしくは資料を参照ください。）

＜質疑＞
〇鳥越先生
本単元の３つ目の目標について教えて欲しい。
〇小野先生
記述している内容を単元の中でおさえるということ。

〇小川先生
スタートアップ学習は、本単元の学習の舞台に全子どもをどうのせるかというために行うこと。
単元に向けての関心意欲を高めるために行う活動。０次の学習といえるのではないか。
セットアップ学習は、何かその単元で身に付けさせたいことが明確にあるということ。その力を身に付けさせるためにパッケージされたものというように聞こえるが。どうか。
〇小野先生
内容と形式について、教師としては明確にどんなところを身に付けさせていくかは明確にもっておく。

〇小川先生
くらべるということばの力を使うことによって、しまうまとライオンの違いをとらえる。幼稚園の学習、発達段階をふまえると、スタートアップ、セットアップの意味は。
〇小野先生
幼稚園でもくらべるということは経験している。国語としての視点から行っていく。なぞなぞあそびでも問いと答えにはふれている。そこを国語として取り上げていく。
〇小川先生
幼稚園での経験レベルのものを学習の舞台へ引き上げていくということが提案性ということで考えればいい。

〇鳥越先生
「くちばし」でくらべる、ということは行ってこなかったのか。機能や形状。
〇小野先生
それぞれはぴったりだね。ということでは押さえたが。そのときは因果関係のとらえ、子どものことばでは理由、というように論理関係のおさえを行っていった。くらべるは子どもの思考にはあったかもしれないが、授業では前面に出して扱わなかった。子どもにとっては、「どうぶつの赤ちゃん」がくらべるという点では、初めての授業。

〇小川先生
グループでの話し合いの観点について
・指導上の立場、題材観、単元観について、指導案の左側
　そういったところが機能を果たしていない。そこになにを書くか。
　どういう力を身に付けさせたいかがシャープに出てくるようにするには、どうしたらいいのか

No218　小学校の国語を語る会

〇田中先生
・幼小の連携
・小学校の説明文のスタートとしての位置づけ
・幼稚園の学習、遊び、集団的といえば集団的だが、小学校は、集団で授業という共通の目標に向かってのスタート。他者とつながることばというあたりが話題になってくるのではないか。

〇松本先生
　１年生の説明文は「くらべる」。観点（話題）を示していっている２次の学習活動の意図を教えて欲しい。
〇小野先生
　じどうしゃくらべは、論理関係で読んでいった。どうぶつの赤ちゃんでは、子どもが自然な形でくらべたい、くらべるを意識した授業づくりになっていった。終わったあとでも比較はできるが、最初からくらべたいという気持ちが出た上で授業に入っていった。
〇松本先生
　観点が出てきにくい、俯瞰するというのは早いということはなかったか。
〇小野先生
　くらべるということ自体は可能だったと考える。
〇赤木先生
　子どもの発言の中にくらべるということ、これからのめあてがすっと出てきたわけではないが、子どもが言わなかっただけで、これからくらべるということは認識できていた。小野先生は引き出そうとしたが。松本先生の発言については、ライオンを読んで、しまうま読むという流れでいくと、ライオン読むときに、しまうまとくらべるということは出てくる。ならば、くらべるという思考を使いやすくするという意味ではあるのではないかということはこれから考えていくという視点には成りうる。
〇小川先生
　丸ごと読みの発想。くらべるという発想で丸ごと読みをすると、赤ちゃん、成長といった層が出てくる。その層が出てくるということを授業化されたのではないか。
〇磯野先生
　丸ごと読みだと、一度読んで、ライオン、しまうまが入ってから深めていくということになり、子どもは「くらべたいなあ」ということになっていく。
　松本先生の質問は、この文章の最初にある２文を読むと、比べて読むことはしない。最初の２文から読むスタンスをもって読むなら、くらべるにはならない。全体を読んでから頭の中に入ってから読むと比べるというスタンスになっていくのかな。小野先生は、後者のスタンスに立ってというために作っていかれたのかな。
〇小野先生
　問いと答えの関係はないがしろにはしたくない。くちばしの段階からおさえているので、そこに目を向けていくことは、一読からできていた。授業を重ねるたびにその反応は出ていたし、大きくなっていた。その上で、今回はくらべるというところに特化していった。
〇嶋村先生
　単元目標の「読む能力」について
　子どもは、すごいねという思いをもっていく。最後の３次で子どもたちが交流したときに、動物がそれぞれ生きるためにふさわしい成長をしているという目標に合う姿がどのように出てきたのか。具体的なものを教えて欲しい。
〇小野先生
　ワークシートを見て説明
　表にまとめたところで、カンガルーが出てきて、パンダ、等につながっていき、「守られていきている」「お母さんに守られている」といったことは出てきたが、板書には十分に位置づかなかった。

〇小川先生
スタートアップ、セットアップについて整理するとどうなりますか。
〇小野先生
今までも文章に対する関心を深めておくという取り組みはあった。今回のスタートアップは、内容や方法知についても目が向くように子どもの素朴な概念を耕すという活動を意図している。
〇小川先生
スタートアップは０次で、セットアップは、直観などをもとうとする段階ということですね。

＜グループで話し合い＞
＜グループ発表＞
（鳥越先生）
３つの課題
・遊び集団から学習集団へどうつなげていくのか、大きいのはスタートアップ学習なのではないか。子どもたちは幼稚園から知的なものに転換していく。その次のセットアップで方法や内容について考えていく段階に子どもたちが同じスタートラインに立って学習し始めることができる。よく考えられている。
・幼稚園と小学校という段階は、子どもたちの遊び的な経験をいかしているという点から幼小の差が埋まってくるのではないか。
・説明文のスタートを最初からどう扱っていくのかということは、内容知、低学年はそこを重視したものが多かった。その中でくらべるを前面に出して行っていくということについては、そうあるべき。今回のくらべるということの学習の流れは子どもが方略を意識して学習しているというように思えた。子どもがくらべるは自然にしているが、それを言葉に出してというのは難しい。そこを教師が手助けしていくのは当然でよかったのではないか。

（赤木先生）
・スタートアップが有効。児童が比べたくなくような学習だった。問いと答えを探すと比べるのどっちがいいか、については、子どもたちの意見がどんどん出てくるという点で比べるはよかったのではないか。

（八代先生）
・内容でつなげるということが今までは多かったが、３次の出口に向けて方法面でつながっていくということは子どもにとって有効だったのではないか。
・幼小のつながり、素朴な概念の耕しがしっかりできているので、３次の活動もやらされ感なく無理なくできている。
・子どもは自然とくらべるということをしている。それを引き出していくようにした。
・３次の動物を選んだことについては、捕食関係ということではなく、観点で比べやすいものを選んで提示していったということだった。
・事例を３次で増やすと、まとめの文章を１年生でも書くことができるかもしれない。

（塩崎先生）
・スタートアップ学習について
　今回の単元でいくと、動物園があったが、スタートアップ学習は、日ごろの生活の中に学習のネタはいっぱいあるんだ、ということを改めて学習者に意識させるという点でも意義があった。何をとりあげるかは教師のうでになるが、そこは問われる。
・指導案の左側
　身に付けさせたい力にあった単元感は児童の実態を書くべき。キーワードとしては、身に付けさせたい力がはっきりしてそのうえで書くようにしないと意味がない。動物の赤ちゃんでいうと内容知のところと比較と

いう方法知という側面から書かれているということを確認した。方法知として、くらべるということはできにくいかもしれない、普通の学校の先生では、難しい。二つ三つの観点から読みを比較していくことができるのはすごい。これから使える力になっていく。

（嶋村先生）
　比べて読む力は大事な力。初発の感想を書かせて整理をかけていくということをしてきたが、あえてそこをスタートアップ、セットアップを組んでシャープにしていったということが勉強になった。何をスタートアップ、セットアップにもっていくかということが大切になる。いわゆる、単元を貫く言語活動とういことも出てくるかもしれない。内容面だけでなく方法面に着目して取り入れていったなど、いろいろとなかみが考えられるという意見が出た。１年生にとってそれがどの程度のものになっていくかというのは悩みどころ。１次の心がどきっとしたところを見つけようというめあてについては、他のめあてもあるのかもしれないという話題も出た。

〇小野先生
クラスの実態。方法と内容どちらに目を向けてもいいよということでこのめあてのことばを使った。

小川先生より

・次の指導案では、指導案の左側の書き方を変えていく必要がある。シャープになって、身に付けさせたい力をはっきりさせていく。
・附属の研究は学習の過程としての主張。単元の時間が増えすぎる。単元の時間をどう縮小するかは考えていかないといけない。言語活動の充実、生活科の中で比較ということは当然行う。国語でわざわざしなくても、生活科の中でしている。言語活動の充実というのは教科横断的なところでどう位置づけるかも問われている。横断的なところが見えてくると、スタートアップ学習がスリムになっていく。他の教科との関連を深めていく必要がある。
・低学年の学習、子どもが「おお、おもしろい」と来ないといけない。それをさせようとしないといけない。子どもが「わかったおもしろい」と感情面をともなってこないといけない。なめらかにしすぎると感動がなくなる。教師の頭の中にはなめらかな思考があった上で、子どもに少しずつ出していかないといけない、教師のかかわり方ともいえる。

田中先生より

・幼小の連携、スタートアップ、セットアップを設けたのが、提案の柱。幼稚園では環境構成がとても重要な要素。そこから活動や教師の話が入っていく。どんな情報にふれさせていくかということを大事にしている。それに相当する部分がスタートアップ、セットアップに入っている。学習者の構えをどこまで引き上げておくのかということになるが、そう考えると、１年生だけの話ではなくて、どの学年についてもいえること。大村はま先生は、半年も前から、学級文庫に単元につながる本を置いておいたという話もある。それを単元構想には入れられはしないが、学習の構えを作るということが大変重要ですということを意識化するという点で重要な提案。
・問いと答え。環境構成という意味では、背面掲示に学習結果がいつでも出ていて、問いと答えは、１年生でぜひ、骨身に染みて定着しているというくらいすべき、そこを行った上で今回のくらべて読むという活動がある。それをしないで比べるとなるとうまくいかないはず。年間を通してのイメージがあるからこそ、次にいける、くらべるを取り上げた展開になっていった。
・１次的ことばと２次的ことば（岡本なつき）ということがある。小学校は２次的ことば、幼稚園はくらべるはあり認識はしている。２次的ことばの段階としては、「くらべる」という言葉を使いながらその認識をとら

えるということ。小学校でも１次的なことばの経験をしていくといことを忘れてはいけないが、幼稚園を踏まえて２次的なことばの学習をしていくということが小学校の段階。
・動物の赤ちゃんはそれぞれぴったりの形をしているという発言が出てきているが、これはすごい成果。場合によっては､教師はそこまで教材研究できていないこともある｡そこまで学習者に発見できるようにするなら、教師がそこまでいっていないといけない。教材研究の大切さを感じた。
・指導案の左側。以前、おもしろ見つけの本で年間計画、やがてはそれが指導計画に変わっていくというものを話したが、指導系統のことだが、学校として共有できているという意味がより大切。2 年生にあがる時に、できていることできていないことが示されていくようになると学校の財産になっていく。
・比べ読みについて。まずライオン、次にしまうまではなく、比べ読み、上下にならべて。どっか（教科書会社が）１社していた。同時に上と下で並べながらどうなっているかというのはなかった。中高学年以降のことと思っていたが、列挙型、の説明文で、こうもってきたのは以外と正解であったのはなかったか。

以上